

王漁洋の戦争批判詩―「蚕租行」を中心として―

荒井 禮

はじめに

王漁洋（一六三四～一七一―）、名は士禎、漁洋は号である。清代を代表する詩人の一人であり、また詩評家でもある。従来、漁洋の詩はとりわけ山水詩に優れるとされ、自然の景色を描写した詩が注目されてきた。しかし、山水詩とはかけ離れた印象を与える戦争を詠じた詩にも注目に値するものがある。それは、彼が明末清初の動乱期に生を受け、少年期に戦争を肌で感じた人物であったことに関係している。

漁洋がはじめて戦争の脅威に遭ったのは、崇禎一五年（一六四二）、彼が九歳の時の冬一二月である。この時、清の軍隊が故郷の新城（山東省桓台县）に侵攻したため、翌年の崇禎一六年（一六四三）、漁洋一家は戦火を避けて鄒平（山東省鄒平県）の長白山に行くこととなった。翌年（一六四四）、清軍が首都北京を逆賊李自成から開放した。清が中国の支配者となり、年号は順治となった。順治二年（一六四五）、漁洋一家は郷里に帰った（注一）。

再び漁洋が戦争の脅威にさらされるのは、順治三年（一六四六）、漁洋一三歳の時である。高苑（山東省）の謝遷という人物が反乱軍を組織して新城に侵攻してきた。今度は同じ省内から起こった反清勢力によってもたらされた危機であった。漁洋はまた、鄒平に避難することになる。間もなく反乱軍は清兵によって鎮圧され、翌年（一六四七）、漁洋は帰郷することができた（注二）。

少年期、二度にわたって戦争の脅威を体験した王漁洋は、戦争の愚かしさを悟る。この戦争の体験は、明末清初の当時に於いては特異な戦争批判詩を彼に作らせることになる。例えば、順治一六年（一六五九）に抗清勢力の筆頭だった鄭成功（一六二四～一六六二）が鎮江（江蘇省鎮江市）を攻め落とし、江寧城（江蘇省南京市江寧区）にまで攻め入った時（注三）のことを懐古した「頻歳」（『帶經堂集』卷一二）と題する詩がある（注三）。詩の内容を簡潔に挙げる（注四）。

近年、鄭成功の水軍が江南地方を攻めつづけ、のろしが戦場につらなり、水際には慟哭の声が響く。そこで、清の將軍は作戦を立てて、鄭成功を追い払い、水軍が陣取っていた川も、穏やかな流れを取り戻した。そして、詩は次の二句で締めくくられている。

江淮非異土 江淮は異土に非ず

飄泊汝何憂 飄泊して 汝は何をか憂へん

詩が制作されたのは、鄭成功の侵略から二年後の順治一八年（一六六一）である。王漁洋は、ずっと清に抵抗して戦争を続ける鄭成功に、「江南の地は、異郷の国ではないのだ。海上に止まって抗戦をつづけて、あなたはいったい何が不満なのか（抗戦をつづける必要はないではないか）」と呼びかける。清の統治のもと、国土が安定し始めているのに、明に對する忠義のためとはいえ、戦争でこれ以上、民を疲弊させないでほしいという願いが込められている（注五）。

侵略王朝である清朝の略奪などを批判する戦争批判の詩は数多くある。しかし、被害の大きい戦争による明王朝復興よりも、異民族の清朝統治のもととはいえ、平和である方がよい、というような戦争批判は、漢族としては異例の主張であろう。また、明朝から生を受けていた王漁洋の詩に、このような主張が見えること自体、注目に値しよう。

本論では王漁洋の戦争批判詩として「蚕租行」を考察の対象としたい。「蚕租行」は漁洋初期の作品であり、右に挙げた「頻歳」詩のような特異性がすでに見られるばかりでなく、作詩法においても注目すべき特徴がある。さらに、制作動

機が漁洋自身によって明記されており、彼が戦争批判詩において何に重きを置いていたかを知る手掛かりともなるように思えるのである。

底本には康熙五十年七略書堂刻本『帶經堂集』（『続修四庫全書』所収）を用いた。「蚕租行」は卷三に収録されている。

一、「蚕租行」の戯曲的構成

内容の考察に入る前に、「蚕租行」を概観すると共に、その特徴についても論じてみたい。「蚕租行」は漁洋が自ら付した題下注があり、詩は全部で十解ある。

まず、題下注を挙げたい。ここには「蚕租行」制作の動機が述べられている。

丁酉夏、有民家養蚕、質衣釧鬻桑、而催租急、遂縊死。其夫婦見之、亦縊。王子感焉、作是詩也。

（丁酉夏、民家の蚕を養ふ有り、衣釧を質して桑を鬻^{やしな}はんとするも、租を催すこと急にして、遂に縊死す。其の夫婦りて之れを見、亦た縊る。王子焉れに感じて、是の詩を作る）

順治一四年丁酉（一六五七）の夏、生活に困窮した養蚕家が、婦人の衣や腕輪を質に入れて養蚕の費用に充てようとした。しかし、税の取立ては厳しく、生活費はおろか、税金を支払うこともできず、遂に婦人は自殺する。その夫が帰ってきて、婦人の死を知るや、自らも自殺した。漁洋はこの出来事に感じ入って「蚕租行」を作ったのである。

以下、第一解から第十解まで、順番に見ていきたい。

第一解―「養蚕婦の日常」

陽春三月時　陽春　三月の時

蚕子何蠕蠕　蚕子　何ぞ蠕蠕たる

三日出匭中 三日にして匭中より出で

五日循遽篠 五日にして遽篠を循る

うらかな春三月、蚕の幼虫は元気にうごめく。三日目には養蚕用の箱から出てきて、五日目には竹や葦で編んだむしろの上をめぐる。

第二解―「養蚕婦の不安」

東鄰有少婦 東鄰に少婦有り

養蚕方一壠 蚕を養ひて一壠に方たる

夜夜伴蚕眠 夜夜 蚕を伴ひて眠り

桑葉恐不周 桑葉 周ねからざるを恐る

東隣の家で蚕を育てる若い婦人がいて、蚕を養うための箱につきつきりでいる。夜中も蚕と共に眠って、蚕の餌となる桑の葉が、明日、枝に十分についていないことを心配する。

第三解―「不安の的中」

朝出南陌頭 朝に出づ 南陌頭

猗猗望桑柔 猗猗として 桑の柔らかなるを望むも

亦不見桑柔 亦た見ず 桑の柔らかなるを

榼子醉鳴鳩 榼子 鳴鳩を酔はしむ

婦人は朝早く南のあぜ道に赴き、道すがら、柔らかな桑の葉がふさふさと繁っていることを願っていた。しかし、柔らかな桑の葉を見ることはなかった。すでに鳩に食い荒らされていたのだ(注六)。

第四解―「生活の危機と婦人の献身」

帰来見蚕飢　　歸来して　蚕の飢うるを見

徘徊当奈何　　徘徊して　当に奈何すべき

脱我耳辺釵　　我が耳辺の釵を脱し

鬻我嫁時襦　　我が嫁時の襦を鬻ひよがん

婦人が家に帰つてくると、蚕は飢えていた。どうするべきかと、おろおろするばかり。そこで、自分の鬢のあたりに挿していたかんざしを外し、自分が嫁いできた時に着てきた上掛けと共に売ることにした。桑を買ってきて養蚕に充て、家計を助けるためである。

第五解―「さらなる危機の到来、急な税のとりたて」

阿夫持襦去　　阿夫は襦を持ちて去り

里正持符来　　里正は符を持ちて来たる

漢中索軍租　　(里正いふ)漢中　軍租を索む

不得還顧私　　還た私を顧みるを得ず、と

夫が婦人の上掛けを持って家を出ると、入れ替わりに、村長がお上からのお達しを持って来た。そして、婦人に告げる、「漢中(陝西省漢中市)の方で、軍隊が兵糧を求めている。兵糧をまかなうための税金を速やかに納めよ。自分の家計を省みることはできないぞ」と。

第六解―「納税期間の猶予を懇願する」

里正且上坐　　(少婦いふ)里正　且らく上坐せよ

黽勉具晨炊 黽勉として 晨炊を具へん

但緩一月餘 但だ緩むること一月餘なれば

蚕成壳新糸 蚕 成りて 新糸を売らん、と

婦人は村長に納税期間の猶予を請う。「村長さま、しばらく家にあがって行ってください。一所懸命に朝ごはんをお作りしますので、召し上がってください。ただ、税を納めますのに一月ばかりの猶予をいただければ、蚕が育って、その吐く糸をお金に換えることができます」と。

第七解―「無慈悲な現実」

新糸亦難売 (里正いふ)新糸も亦た売り難く

新穀亦難収 新穀も亦た収め難し

不見馬上郎 見ずや 馬上の郎

雉尾紅錦裘 雉尾 紅錦の裘を、と

婦人の懇願に対して、村長は無情な答えを返す。「蚕が成長して、糸を吐いたところで、需要のある時期でなければ、新しい糸は売れない。また、時期はずれのため、新しい穀物を収めることもできない。得られるか分からない不確かな収入を待つわけにはいかなない。見たまえ、馬に跨るえらい役人さま(注七)が納税を待ちわびているのだぞ」と。

第八解―「一時しのぎ」

再拝謝里正 再拝して 里正に謝す

丈人且旋帰 丈人 且に旋ち帰らんとす

鬻我嫁時襦 我が嫁時の襦を鬻ぎ

脱我耳辺釵　我が耳辺の釵を脱せり、と

二度お辞儀をして村長に告げる。「お金を手にした夫がすぐに帰ってきます。わたしが嫁いできた時に着ていた上掛けと、わたしが挿していた釵を売りに行つたのです」と。ここで、村長は去る。

第九解―「絶望の末に自殺する婦人」

蚕応黒瘦尽　蚕　応に黒瘦し尽くすべし

軍租持底当　軍租　底を持てか当てん

痛哭視孤兒　痛哭して　孤兒を視

畢命朱糸繩　命を朱糸の繩に畢ふ

婦人は思う。「蚕の餌となる桑の葉は鳩に啄まれていた。餌を満足に与えられない蚕は黒く変色し、瘦せ細ってしつかりと育たないだろう。いったいどのようにして、軍に納める税金を払えばよいのか。もはや、為す術もない」と。痛ましいほどに泣き叫び、独り残される子供を見つめながら、婦人は赤色の繩で自らの命を絶つたのである。

第十解―「夫婦そろつて冥土へ」

阿夫還入門　阿夫　還りて門に入れば

不復見故妻　復た故妻を見ず

生既為同衾　（阿夫いふ）生きては既に同衾を為し

死当携手歸　死しては当に手を携へて歸すべし、と

夫が帰つてきて、門をくぐると、そこには自殺した婦人の死体があり、生きた姿を目にすることはできなかった。そこで、夫は語る。「生きているときは、めでたく夫婦となつて、愛を成就した。死ぬときは、おまえと手をとりあつて、

一緒に黄泉に行こう」と。遂に、夫も婦人の後を追って自殺するのであった。

以上「蚕租行」を概観してみた。全篇五言で、一解は四句でまとめられており、一解ごとに場面が変わる。一解ごとに舞台や話題、さらには登場人物までもが入れ替わりするさまは、まるで戯曲を見ているようでもあり、全四〇句の詩であるにもかかわらず、その長さを感じさせない。この場面転換によって戯曲を思わせる「蚕租行」の作詩法は、漁洋詩の一特徴として新たに注目することができよう。

二、「蚕租行」の背景

「蚕租行」は、租税の急なとりたてに苦しめられる夫婦が主題となっている。税を納めきれず、たとえ税金を払ったとしても、自分たちが生きていくことができず、遂に自殺に追い込まれた夫婦を通して、無慈悲なとりたてを行なう役人を批判する社会批判詩としての面が濃厚である。

実際に戦争を描写した部分がない「蚕租行」を、なぜ戦争批判詩としてとりあげたのかを、ここで論じておきたい。まず注目しておきたいのは、「蚕租行」が順治一四年（一六五七）の夏に作られたこと（漁洋の自序）、そして、税金をとりたてにやってきた村長の台詞、第五解の第三句の「陝西省漢中市のほうで、軍隊の兵糧をまかなうための税金を求めている（漢中索軍租）」である。

漁洋の自序と村長の台詞から、順治一四年夏に、漢中の方で兵糧を求めるような事態にあったことが分かる。実際に、順治の初めから順治一四年にかけて、漢中（陝西省）に近い四川省、そして貴州省・広西省（広西壮族自治区）・雲南省で、張献忠（一六〇五～一六四六）と孫可望を中心とした反乱軍による戦がしばしばあった。孫可望について、ここで詳しく触れておく。

主に参考にした文献は、中華書局本『清史稿』巻二四八・孫可望伝、巻二二四・李定国伝である。

孫可望は陝西延長(陝西省延長県)の人で、明末に李自成らと明朝を苦しめていた逆賊張献忠に従って、自らも賊となり、また李定国・劉文秀・艾能奇らと共に張献忠の養子となっていた。

張献忠は、明末の崇禎一七年(一六四四)に、四川省の重慶を陥落させ、ここを居城とした。順治三年(一六四六)、清軍に敗れて死んでいる(注八)。この時、四川省は清の統治下となっていく。

張献忠が死ぬと、孫可望は李定国らと共に、生き残った兵を引き連れて、貴陽(貴州省貴陽市)に行った。この当時、阿迷(雲南省)土司であった沙定洲が雲南を荒らしていた。そこに、孫可望は兵を率いて乗り込んでいった。沙定洲は楚雄(雲南省楚雄市)を攻めている最中で、可望らを迎え撃った。孫可望らは、沙定洲を打ち負かすや、雲南省に入り、たちまち省全土を制圧した。

なお、孫可望が雲南に侵攻しようとした時、張献忠の養子仲間だった劉文秀が、清の將軍となっていた呉三桂(一六一一〜一六七八)と三度戦って、三桂に勝利している。この際、呉三桂は漢中に陣營を構えていた。順治五年(一六四八)のことである(注九)。

孫可望は雲南を手中に収めるや、平東王と名乗り、通貨まで鑄造した。雲南攻略には、張献忠の養子仲間だった李定国や劉文秀も大いに力を振るった。彼らは、孫可望とはもともと同等の身分だと考えていたので、孫可望の手下になるうとしなかった。そして、順治六年(一六四九)、孫可望は、李定国が武術鍛錬を行なっているのを、謀反を企んでいるのだと難癖をつけて、棒で百叩きの刑に処した(注一〇)。この時から、養子仲間たちの間の不和が大きくなっていく。

順治六年(一六四九)、王を自称した孫可望は、自らの権威を揺ぎないものとするため、明の皇族の生き残りで、王を称していた桂王朱由榔に自分を秦王に封ずるよう要求した。当時肇慶(広東省肇慶市)にいた桂王は、清軍の侵攻に脅威

を抱いており、戦力の増強を見込んで、孫可望の要求を受け入れた。

明王朝の生き残り桂王にとりいった孫可望は、桂王を手元に置くことで、自分の兵たちに、さらなる威厳を示そうとした。順治八年（一六五一）、清軍の兵によって西に追いやられていた桂王は、広南（雲南省広南県）に逃げる途中、孫可望に強引に迎えられた。翌年（一六五二）、孫可望は、桂王を貴州省の安隆所に遷すと、土地の名前を安龍府と変え、これまで以上に専横な振る舞いをするようになった。桂王は困り果ててしまった。

このころ、張獻忠の養子仲間だった李定国が、清軍を退けて、一時、広西の地を取り戻していた。兵力も次第に力を強めていた。桂王は、普段から専横な振る舞いの多い孫可望よりも、明に対する忠誠が強い李定国に心惹かれていた。孫可望は、李定国が疎ましくなり、定国が広西を取り戻す途中で、湖南省の衡州で一度敗北したのを口実に、彼を殺そうとした。この計画を察知した定国は可望のもとに行くことはなかった。

順治一〇年（一六五三）から一三年（一六五六）まで、雲南・広西・貴州で、孫可望と李定国らと清軍との一進一退の攻防が繰り返される。順治一〇年には、李定国は桂王に忠臣として迎え入れられた。これに怒りを覚えた孫可望は、定国を忠臣として迎え入れるのに関与した人間一八人を殺した。

順治一三年（一六五六）、南寧（広西壮族自治区南寧市）で、清軍に敗れた李定国は、安隆を経過して雲南に入ろうとしていた。これを知った孫可望は、部下の白文選に命じて、桂王に安隆から貴陽（貴州省貴陽市）にいる自分のもとに遷るよう勧告させた。白文選は、孫可望をころよく思っていないかった。そこで、桂王にわざと遅く行進して、敗走してきた李定国と合流するのを待つように勧めた。

桂王一行は李定国軍と合流したところで、彼らは目的の地だった貴州省の貴陽ではなく雲南省に行った。この時、孫可望をころよく思っていないかった武將たちも次々と寝返って、李定国のもとに走った。そして順治一四年（一六五七）、

遂に孫可望は桂王に叛くのである。

孫可望は桂王を攻めた。しかし、桂王の武將李定国らに敗れて、長沙(湖南省長沙市)に逃れ、清軍に投降した。後、呉三桂ら清軍は桂王を捕らえるまで、進軍を続けることになるが、孫可望の反乱はここで治まる。時に順治一四年の十月であった。

なお、順治一四年、桂王討伐のため、呉三桂らが貴州省に侵攻していった時、漢中(陝西省漢中市)から出発したと、呉三桂の伝にある(注一一)。恐らく、孫可望らの征伐に乗り出して、順治五年(一六四八)に漢中に陣営を張ってから、順治一四年まで、漢中が孫可望攻略の要所となっていたに違いない。

王漁洋の「蚕租行」は、順治一四年夏に、漢中で兵糧が不足しているという描写があつた(第五解)。つまり、漁洋の詩は、実際に起こっていた戦争中の悲劇を描写していたのである。戦争のために、税は重くなり、平民たちの生活は圧迫された。そして、遂には夫婦そろって自殺する状況が生まれる。戦争による悲惨さを訴える「蚕租行」は、戦争批判詩と認めることができるだろう。

三、「蚕租行」事件の現場について

「蚕租行」は、平民を憐れみ、無慈悲な現実に憤る心を制作動機としている。それは、一士大夫としての使命感から来る純粋な社会批判の思いに他ならない。これは、「王子感焉」と王漁洋の心を動かした悲惨な事実があるからこそ、詩は説得力を持つのだろう。

ところで、王漁洋はいつたい何処で「蚕租行」事件を耳にしたのだろうか。事件が事実であるならば、王漁洋は当時、事件現場の近くにいななければならない。ここでは、「蚕租行」事件が何処で起こり、どのような経緯で漁洋の耳に届いた

のかを論じてみたい。

まず、順治一四年の事件当時、王漁洋が何処にいたのかに注目してみたい。なお、漁洋の事跡については、『漁洋山人自撰年譜』（孫言誠点校『王士禎年譜』所収、中華書局、一九九二）を参考にした。

順治一二年（一六五五）、王漁洋は会試に合格すると、殿試を受けずに都の北京から郷里である新城に帰った。翌年（一六五六）の四月、長兄の王士祿（一六二六―一六七三）を訪ねるため東萊（山東省萊州市）に行った。五月には郷里に帰っている。そして順治一四年、八月に歴下（山東省済南市歴下区）の明湖において「秋柳詩四首」（『帯経堂集』巻二）を作っている。

また、清・恵棟（一六九七―一七五八）の『漁洋山人年譜補』（『王士禎年譜』所収）の順治一四年丁酉の條に見える漁洋の「丁酉詩自序」に、「丁酉春、済南諸州邑苦旱、夏秋又苦雨潦（丁酉の春、済南の諸州邑は旱に苦しみ、夏秋も又た雨潦に苦しむ）」（注一二）とある。

年譜に書かれたことから、王漁洋は順治一二年に、北京から故郷の山東省に帰ってから、順治一四年まで、山東省内にいたことが分かる。

次に、注目したいのは事件現場である。事件現場を推測する鍵となるのは、「蚕租行」の主人公である婦人が、養蚕婦だということである。

養蚕が盛んなところといえば、江南地方、陝西地方か四川地方である（注一三）。陝西地方と四川地方は、当時、孫可望ら反乱軍と戦う前線基地となっていたため、婦人が養蚕に従事できるような環境ではなかっただろう。また、江南地方では、漁洋のいる山東省から離れすぎている。王漁洋が、養蚕婦の悲劇を知るためには、やはり、この事件が山東省で起こったものでなければならぬ。では、山東省でも養蚕は盛んだっただろうか。

王漁洋が故郷である山東省の産物を詠った詩に「山蚕詞四首」（『帶經堂集』卷二）がある。これは、其一に、「曾說蚕叢蜀道險、誰知齊道亦蚕叢（曾て説く蚕叢蜀道は險しと、誰れか知らんや齊道も亦た蚕叢なるを）」とあり、山東省でも養蚕が盛んなことを誇っている。なお、「山蚕」とは「野蚕」のことで、家の外で育つ蚕のことである。これは、王漁洋の『香祖筆記』卷五に拠って知ることができる（注一四）。

王西寧仲威鉞暑臆臆説山繭一條甚悉、可補孫文定廷銓山蚕説所未及、輒録於此。葉溪談記、禹貢、萊夷作牧、厥筐絜糸。爾雅曰、絜、山桑。師古曰、山桑之糸、其韌中琴瑟之絃（注一五）。蘇氏曰、惟東萊有此糸。以之為繪、堅韌異常。萊人謂之山繭紬（注一六）。

（王西寧仲威鉞の暑臆臆説の山繭を説くの一條は甚だ悉くせり、孫文定廷銓の山蚕説の未だ及ばざる所を補ふべし、輒ち此ここに録す。葉溪談記にいふ、禹貢にいふ、萊夷は牧と作り、厥の筐と絜糸とあり、と。爾雅に曰く、絜は、山桑なり、と。師古曰く、山桑の糸、其れ韌やかにして琴瑟の絃に中つ、と。蘇氏曰く、惟だ東萊のみ此の糸有り。之れを以て繪を為れば、堅韌なること常に異なれり。萊人は之れを山繭紬と謂ふ、と）

これに拠れば、山に生じる桑を食べた蚕の吐く強韌な糸を、山東省の人は「山繭紬」と呼んだことが分かる。強韌な糸を「山繭」というならば、その糸を吐く蚕は「山蚕」ということになる。

また、山東省では、家で養う「家蚕」と「野蚕」を育てる（注一七）。其三を挙げたい。

春繭秋糸各自諳	春繭秋糸	各自諳んじ
一年三熟勝江南	一年三熟	江南に勝れり
柘蚕成後寒蚕統	柘蚕成りし後	寒蚕統ぐ
不道吳王八繭蚕	道はず	吳王の八繭蚕

第一句は、蚕の糸の収穫について、養蚕婦たちはよく熟知していることを言う。第二句は、山東省の蚕には、一年に三度糸を吐くことができるものがあり、そのため、一年に二度糸を吐くことができる江南の蚕よりも勝っていることを言う。

第三句は、八輩蚕のことを指し、五匹の蚕をそれぞれ季節ごとに育てることで、一年に八回糸を収穫できることを言う。五匹のうち、三匹が二度糸を吐くことができるので、一年に八回の収穫ができるのである(注一八)。第四句は、山東省の蚕は、呉王の国、つまり江南の蚕と比べて、ずっと優れていることを言う。「八繭蚕」は八輩蚕のことである。

右に挙げた詩によって、養蚕が山東省でも盛んだったことが分かる。ということは、「蚕租行」に詠われる婦人の出来事も、山東省で起こった事件であっても不思議はない。そして、王漁洋は順治一四年夏の事件当時、山東省にいたのである。

そして、山東省の中で、特に「山蚕」の養育が盛んなのは「東萊」であることが『香祖筆記』に引かれる書によって分かる。「東萊」といえば、当時、漁洋の長兄である王士祿が赴任していた地である。「蚕租行」事件は、この兄によってもたらされた情報であったかもしれない。漁洋が実際にあった悲惨な出来事を、自らの耳で聞くことができたとしても、おかしくはないのである。

また、「蚕租行」には、略奪とか殺戮といった戦争による直接的な被害は一切描かれていない。これは、漢中からは戦争の直接的被害が届かない地域を舞台としていることを示すだろう。このことから、「蚕租行」事件が、山東省で起こったと見ることができるだろう。

四、平民の立場に立つての戦争批判

「蚕租行」は、その詩の中に、「漢中索軍租」（第五解）という句があることから、当時、漢中で起こっていた孫可望による反乱を詠みこんでいたことが分かった。また、漁洋の事跡と「山蚕詞四首」を見ることで、山東省でも養蚕が盛んであり、当時、山東省にいた漁洋が養蚕婦の悲劇を、実際に耳にした可能性があることを指摘した。

実際の戦争によって、苦しめられる平民を描写するこの詩は、戦争批判詩と言えるものである。ただ、戦争批判と言っても、詩人の社会的立場によって、批判の対象は異なってくるだろう。

明朝の遺民という立場であれば、清軍を批判する言葉が見えるだろう。また、清朝に仕える身分であれば、清軍を批判することはできない。ここでは、王漁洋が「蚕租行」において、どのような立場に立って戦争批判をしたのかを論じてみたい。

「蚕租行」を見てみると、戦争を暗示する「軍租」という言葉が二箇所ある。一つは、第五解の「漢中索軍租」（第三句）である。これは、実際に戦争が起こっていることを示すだけでなく、「不得還顧私」（第四句）と続くように、税のとりたてが厳しくなった理由でもある。

もう一つは、第九解の「軍租持底当」（第二句）である。第一句に「蚕応黒瘦尽」とあるために、もはや納税に充てる手立てがないことを述べている。そして、この「軍租」こそが、養蚕婦を自殺に追い込んだ原因だったことが分かる。

養蚕婦を自殺に追い込んだ要因は他にもある。「里正」の存在である。税金を納めるためには、家計を省みることが許されない。婦人に告げ（第五解）、納税期間の猶予を求める婦人の要請を、無慈悲にも却下する（第七解）。この「里正」の言動が婦人の自殺を促したと言える。また、「里正」を支配している存在もいる。それが第七解の「馬上郎」である。

「里正」も「馬上郎」も、共に清朝の支配下にいる者たちである。そして、「軍租」を求めた軍も、呉三桂率いる清の軍隊であった。ということは、「蚕租行」で、批判の対象としたのは、清朝だったのだろうか。

「軍租」を求める要因となった反乱軍の首領格だった孫可望は、一時期でも明朝の皇族であった桂王を擁し、明の將軍となっていた。そして、彼の仲間であった劉文秀は一時呉三桂を苦しめた。また、李定国は最後まで明の將軍として清と戦った。長い戦争のきっかけは、この反乱軍によるものであった。では、王漁洋が批判したかったのは、明朝復興を願う反乱軍だったのだろうか。

注目したいのは、「蚕租行」に描かれる悲劇は、略奪や殺戮といった戦争の直接的な被害によって起こされたものではない、ということである。また、全部で十解ある中で、最も多く描かれているのは、苦悩する平民の姿である。

戦争の直接的な被害を受けないということは、戦地から遠く離れていることを意味する。しかし、戦争とは関係のない土地に居ても、戦争の被害は避けることができない。そして、戦争の被害を一番受けるのは、清朝政府にも、戦争にも抗うことのできない、力なき平民たちなのである。

戦争の被害は殺人や略奪、破壊といった直接的なものばかりではない。戦争を続けるために必要となる兵糧を支えるために、平民たちの血税が吸い上げられ、彼らの生活を圧迫するのである。戦争は、その勝敗に関係なく、苦しめられるのは常に平民なのである。「蚕租行」が、戦争による殺人や略奪を一切描写していないのは、直接的でないにせよ、力なき平民に降りかかる理不尽な戦災があることを訴えたかったためであろう。

王漁洋は明朝の遺民という立場ではなく、また清朝に仕える役人の立場でもなく、力なき平民の立場にたつて、人類にとつて無益でしかない戦争そのものを批判の対象としていたのである。

漁洋は、戦争が明の遺民にとつても、清朝にとつても無益なものでしかなく、人類には不幸しかもたらさないことを見抜いていた。そのため、誰もが平和に暮らせる世の中を願って、戦争を批判するのである。それは、自らも弱者であった少年期に戦争の脅威を体験し、「蚕租行」の序文に「王子感焉」と、戦う力も権力もない弱い人々に感情移入で

きる漁洋だからこそ導き出せた答えなのである。

五、「蚕租行」に見られる杜甫詩の影響

王漁洋の「蚕租行」は、戦争に苦しめられる弱者の立場に立って、戦争を批判したものだ。弱者の立場に立っての戦争批判は、杜甫（七一二〜七七〇）の「兵車行」（『杜詩詳註』巻二）や、「三更三別」（『杜詩詳註』巻七）などの戦争批判詩にも見られる姿勢である。杜甫が民衆のために戦争批判詩を作ったことは、鈴木修次氏の『唐代詩人論（三）』「杜甫論」（講談社学術文庫、一九七九）において指摘されている（注一九）。

従来、王漁洋が編纂した盛唐詩集『唐賢三昧集』に、杜甫の詩が採られていないことなどから、漁洋は杜甫を軽んじていたと誤解されることもあった（注二〇）。しかし、漁洋は「論詩絶句」其九（『帶經堂集』巻一四）で、杜甫の詩を次のように評している。

草堂樂府擅驚奇 草堂の樂府 驚奇を擅にし

杜老哀時託興微 杜老は時を哀しみて興微を託す

「草堂」は李白（七〇一〜七六二）のこと。彼の詩集が『草堂集』と言ったのによる呼称。李白の樂府は、驚くほど素晴らしい。杜甫は時勢の衰えを悲しんでは、国の安定を詩に託した。漁洋は時勢を憂え、国を思う気持ちを詩の作り手として、杜甫を第一の詩人として評価していることが、「論詩絶句」から分かる。

また、『師友詩伝録』（清・郎廷槐問、漁洋答、『清詩話』所収、上海古籍出版社、一九七八）の第二六條で、詩は本来美しい表現だけでなく、自分の目の当たりにした現実から湧き上がる思いを、他者に伝え、訴える、といった内容も充実していなければならないのに、時代が下ると華美な表現ばかりを追い求める人々が現れ、それに倣う者たちも現れる

という弊害を述べた後、彼らとは異なり、表現も内容も充実させた詩人として杜甫を挙げる。

至杜少陵乃大懲厥弊、以雄辞直写时事、以創格而紓鴻文、而新体立焉。較之白太傅諷諭詩、秦中吟之属、及王建、張籍新樂府、倍覺高渾典厚、蒼涼悲壯。

(杜少陵に至りては乃ち大いに厥の弊を懲らし、雄辞を以て直ちに時事を写し、創格を以て鴻文を紓し、而して新体立つ。之れを白太傅の諷諭の詩・秦中吟の属、及び王建・張籍の新樂府に較ぶれば、倍ます高渾典厚、蒼涼悲壯を覺ゆ)

杜甫が時事を描いた詩は、白居易や張籍・王建よりも優れるとしている。これらの評を見る限り、漁洋の戦争批判詩が、杜甫の戦争批判詩を意識していたとしても、おかしくはないのである。

ここでは、漁洋の「蚕租行」と杜甫詩との類似点を挙げ、「蚕租行」に見られる杜甫詩の影響について論じてみたい。

1、「兵車行」との類似点

①民衆の立場にたった戦争批判

「兵車行」は戦争を為政者の立場ではなく、実際に戦争に駆り立てられた兵士の立場から、戦争に対する恨みを述べた詩である(注二一)。杜甫詩は眼前の事実を題材にしている。

漁洋の「蚕租行」も、実際に起こった戦争を下敷きとし、平民の立場にたった戦争批判を行なっていた。両者とも実際の戦争に苦しめられる民衆の立場にたった詩を制作していることが分かる。この民衆のための戦争批判は、もっとも重要な類似点である。

②俗語の使用

杜甫の「兵車行」の特徴として俗語の使用が挙げられる。例えば、出征する兵士に、その家族が追いついてきて泣く場面に見える、「耶嬢妻子走相送(耶嬢と妻子と走りて相送る)」の「耶嬢(父母)」と「妻子(妻)」などである。

王漁洋の「蚕租行」にも俗語の用例があった。第五解「阿夫持襦去(阿夫襦を持ちて去る)」の「阿夫(旦那)」や第九解「軍租持底当」の「持底(以何)」などである。

これら俗語の使用は、登場人物の会話や、情景描写をいきいきとさせる効果を狙っているだろう。これは彼らの詩に戯曲的な面白みを持たせることに一役買っていると言える。彼らは詩に戯曲的面白みを持たせることで、戦争批判という主張を民間に伝え、さらに広範囲に主張が伝播されることを意図したのだと考えられる。

③ 税のとりたての厳しさを訴える場面

「兵車行」と「蚕租行」とでは、税のとりたての厳しさを訴える描写で、類似した表現や構成が見受けられる。

「兵車行」は兵士の告白として、「今年の冬は、西方での兵卒がまだ終わっていないのに、県の役人は容赦なく税を取り立てる。しかし、働き手が戦争に遣られていないのに、どうやって税を納めればよいのか(且如今年冬、未休関西卒。県官急索租、租税従何出)」と訴える。

一方、「蚕租行」第九解では、「蚕応に黒瘦し尽くすべし、軍租底を持てか当てん(蚕応黒瘦尽、軍租持底当)」となっている。「軍租持底当」の句が、杜甫の「租税従何出」句に類似していることが分かる。そして、収入源がないために税金が納められないという構成も、杜甫詩との類似が認められる。

以上のことから、王漁洋は戦争批判詩において、杜甫の戦争批判の精神と表現を学んでいたと考えられる。

2、「三吏」との類似点―民衆からの視点と劇的構成

「三吏三別」も、戦争によつて民衆にもたらされる悲劇を述べた詩である。この戦争は、安祿山の乱勃発後（七五五）、至徳元年（七五六）から乾元二年（七五九）まで洛陽の周辺で起こった賊軍討伐戦争を背景にしている（注二二）。「三吏三別」も実際に起こった戦争に取材したものである。

「三吏」とは、「新安吏」「潼関吏」「石壕吏」のことである。詩は、それぞれの土地の役人が平民を戦役に駆りたてる様子、防壁建設を指揮する様子を描写して、戦争の悲惨さを訴える。

この連作について、鈴木修次氏は、「詩人の眼が、しだいに体制から離れてゆくそのところに、この連作の意味があるのである」（二〇〇頁）と言う。鈴木氏の言う「体制」とは、杜甫が政府組織の体制化にあることを意味する。つまり、杜甫の戦争を見る視点が、役人側から民衆側に移ることを言うのである。

杜甫の視点が変化していく様子は、それぞれの詩の末尾を見るとよく分かる。以下、杜甫の詩集に記載された「新安吏」「潼関吏」「石壕吏」の順番通りに、三首を概観したい。

「新安吏」は、官軍が賊軍に苦戦を強いられたため、本来徴兵の必要のない脆弱な若者たちをも戦争に駆り立てるさまを描く。詩は、徴兵される息子を心配する母親に、「息子に取り縋つて泣くのはよしなさい、官軍の大將どのは父や兄のように若者に接するでしょう（送行勿泣血、僕射如父兄）」と、慰めの言葉をかけて結ばれる。この時、杜甫は官軍が、若者を無駄死にさせるようなことはない、と官軍に期待を寄せている。

「潼関吏」は、多くの兵士が賊軍の侵攻に備えて防壁を築いている様子を描く。安祿山の乱勃発後、哥舒翰は潼関を出て、桃林（河南省靈宝県）で安祿山の軍と戦い、大敗を喫した。その時、王朝の兵士数万が、黄河で溺死した。そこで杜甫は、「將軍様、どうか哥舒翰の二の舞にならぬように（請囑防関將、慎勿学哥舒）」と告げて、この詩を結ぶ。杜甫はここでも、官軍に期待を寄せている。

「石壕吏」は、すでに三人の息子を兵役に駆られ、次男を戦争で亡くした老夫婦のもとへ、役人が老人さえも徴兵しようとして来て、老人は家の垣根を越えて逃げ、その老婦人が夫の代わりに戦地に赴くさまを描く。「深夜、人の声は絶え、ただすすり泣く声だけが聞こえた気がした。明け方、石壕村を後にした。途中、逃げた老人に出会い、別れを告げた(夜久語声絶、如聞泣幽咽。天明登前途、独与老翁别)」と詩は結ばれる。

前の二首と異なり、民衆への慰めの言葉もなければ、政府を擁護する言葉もない。ただ、民衆を戦役に駆りつくしても足りず、なおも老人まで駆りたてていく、ひどい現実を描写するばかりである。

以上「三吏」を見てきた。詩は段階を踏んで、政府側にあった杜甫の視点が次第に民衆の側へと移っていく。一方的に苦しめられるばかりの民衆を、段階を踏んで描写していくことで、痛烈な戦争批判をしているのである。鈴木修次氏は「この三篇のくみあわせには、劇的效果を予想しての構成がある」(二〇〇頁)と言う。つまり、「三吏三別」は民衆の視点にたつて戦争批判を行なうため、杜甫によって意図的に編纂されたのである(注二三)。

民衆のための戦争批判、これは王漁洋の「蚕租行」にも通じる精神である。また、一首ごとの効果的な場面転換や、杜甫と役人(「新安吏」「潼関吏」)、老嫗と役人(「石壕吏」といった問答形式で展開していく戯曲的構成は、「蚕租行」にも見える構成である。

3、「三別」との類似点―登場人物の告白による報道文学

「三別」とは「新婚別」「垂老別」「無家別」のことである。鈴木氏は、「三別」の構成も、「三吏」と同様に、次第に政府への批判が痛烈さを高めていくとする(二〇〇頁)。以下、詩集の配列どおりに「三別」詩の末数句を見ていきたい。

「新婚別」は、新婚だというのに、夫が戦役に駆られて、寂しく独り身ですごさなければならなくなった婦人の告白

として語られる。詩は、「この世はままならぬことばかり、まさか新婚なのに、長くあなたの帰りを待つ身となるとは（人事多錯迕、与君永相望）」と結ばれる。ただ、戦争のために引き裂かれた新婚夫婦の悲劇を描写するのみである。

「垂老別」は、年老いてなお、徴兵されて戦地に赴く老兵の告白として語られる。国のあちこちで戦争は続き、流れる血の已むことない世の中を嘆き、「どこにも樂園などない。どうしてぐずぐずしようか。住み慣れた家を棄てて戦地に行くが、悲しみに内臓は千切れんばかり（何郷為樂土、安敢尚盤桓。棄絶蓬室居、場然摧肺肝）」と、詩は結ばれる。戦争に赴くのを余儀なくされた老人の姿が痛ましく描かれ、戦争批判の痛烈さは、「新婚別」よりも、強調されている。

「無家別」は、負け戦から生還した青年の告白として語られる。なんとか生還した青年を、役人は再び徴兵しようとする。青年には恩返しができぬまま、死んでしまった母親がいた。まだ母の葬式も挙げられずにいるのは、戦争のため。

「世の中には別れを告げる家族すらない者の別れがある。天子は我々を人として認めて下さらないのか（人生無家別、何以為蒸黎）」と、政府へのあからさまな不満と批判を述べて詩は結ばれる。杜甫は、「三吏三別」の戦争批判を通じて、遂に政府のあり方を批判するに至ったのである。

以上「三別」を見てきた。注目したいのは、それぞれの詩に、杜甫の、自身としての言葉が見えないことである。これは「兵車行」と「三吏」にはない特徴である。詩はあくまで、杜甫ではなく、詩の中の登場人物の告白によって展開していく。自身の言葉を極力控え、ただ現状のみを伝えることに務めるこの特徴を、鈴木氏は「報道文学的手法」（注二四）と言う。

王漁洋の「蚕租行」も、漁洋としての言葉は見えない。登場人物たちの会話と行動によって展開している。それは、杜甫の「三別」のように、戦争によってもたらされる現実の惨状を報道文学として、より生々しく世に知らしめるための工夫ではなかつたらうか。

以上、杜甫詩と漁洋詩を比較してみた。「兵車行」では、実際に起こった戦争を背景にしていること、民衆の立場にたつて戦争を批判したこと、俗語を用いること、税のとりたてに苦しむ描写があることなど、漁洋詩との類似点が見られた。

そして、「三吏」では問答形式で詩を展開させる戯曲的特徴を見せ、「三別」では自己の言葉ではなく、詩中の登場人物に語らせることで、現実の悲惨さを偏見なく伝えようとする報道文学的特徴を見せた。これらの特徴は、漁洋の「蚕租行」にも見えるものである。

「蚕租行」は、杜甫の「兵車行」、「三吏三別」の詩が持つ特徴をすべて兼ね備えているのである。さらに、「三吏三別」が二〇句以上の詩一首ごとに場面を変えるのに対し、「蚕租行」は四〇句の詩を四句ごとに区切るこまめな場面転換と、テンポの良い台詞まわしによって、詩の長さを感じさせない。これは、漁洋が杜甫の詩を意識したからこそ、杜甫の詩の特徴をうまく融合させ、杜甫詩よりも読みやすくする工夫ができたのである。

おわりに

王漁洋の「蚕租行」は、税金のとりたてが兵糧を賄うために厳しくなり、自殺に追い込まれた平民の家族、という戦争によって引き起こされた悲劇を描いている。ところが、その詩には実際の戦争の描写がない。それは、戦争による直接的な被害に遭わずとも、その被害は社会的立場の弱い平民たちに容赦なく降りかかることを述べるためだった。

漁洋には、実際に戦争によって苦しめられ、遂には自殺という悲惨な路をたどる夫婦の事件を耳にする機会があった。この悲劇は、実際に起こり得るものだからこそ、強い主張となつて、詩に詠われるのである。

政治にも戦争にも直接関与するわけでもない、ただ平和に生活したいのに、真つ先に苦しめられる対象となる平民、

そんな彼らに感情移入できる王漁洋だからこそ、人類にとって不幸しかもたらさない戦争の悲惨さを見抜くことができたのである。

本論の冒頭に挙げた「頻歳」詩、その最後の二句、「江淮非異土、飄泊汝何憂」も、戦争が無益なものだということ訴えていた。戦争批判詩の中で、王漁洋が最も重きを置いたのは、戦争に関与する軍隊や為政者たちといった加害者を批判することではなく、戦時下においては常になす術もなく犠牲者となる人々がいるという悲惨な現実を、彼ら平民の立場に立って訴えることであつたのである。また、民衆のためを思つて詩作する精神が、杜甫の影響を受けていることも、注目すべきことである。

注

(注一) 『漁洋山人自撰年譜』巻上に、「崇禎十五年壬午、九歳。冬十二月、大清兵至濟南、新城陷(崇禎十五年壬午、九歳。冬十二月、大清兵濟南に至り、新城陥る)」とあり、また、「崇禎十六年癸未、十歳。避兵長白山之魯泉(崇禎十六年癸未、十歳。兵を長白山の魯泉に避く)」とある。なお、漁洋らが帰郷した記事は、王漁洋が長兄王士祿のために著した『王考功年譜』(『王士禎年譜』所収)に見える。「順治二年乙酉、先生年二十歳。濟南諸州邑乱定、先生自山中帰里(順治二年乙酉、先生の年二十歳。濟南の諸州邑の乱定り、先生山中自り里に帰る)」とある。なお、参考にした『王士禎年譜』には西暦が付されているが、ここでは省いた。

(注二) 『漁洋山人自撰年譜』巻上に、「順治三年丙戌、十三歳。高苑賊謝遷寇新城、陥之。避兵長白。避地鄒平、依張氏。時(謝)遷聚衆千人、連破新城・長山諸県、入淄川掘之。僭偽号、置官属、未幾敗(順治三年丙戌、十三歳。高苑の賊の謝遷は新城に寇し、之れを陥る。兵を長白に避く。地を鄒平に避けて、張氏に依る。時に遷衆を聚むること千人、新城・長山諸県を連破し、淄川に入りて之れに掘る。偽号を僭して、官属を置き、未だ幾くもせずして敗る)」とあり、また、「順治四年丁亥、十四歳。自長白帰里(順治

四年丁亥、十四歳。長白自り里に帰る」とある。文中の（ ）は筆者が補った。以下同じ。なお、「依張氏」の張氏とは、王漁洋の妻張宜人の家を指す。

(注三)鄭成功が江寧を攻めた記事は、『清史稿』卷二二四・鄭成功伝に見える。該当箇所を挙げる。「(順治)十六年五月、(鄭)成功率(甘)輝・(余)新等整軍復出、次崇明。(張)煌言来会、取瓜州、攻鎮江、使煌言前驅、沂江上。(中略)成功入鎮江、將以違令斬(周)全斌、繼而积之、使守焉。進攻江寧、煌言次蕪湖、廬・鳳・寧・徽・池・太諸府県多与通款、騰書成功、謂宜収旁郡県、以陸師急攻南京(十六年)五月、成功は輝・新等を率ひて軍を整へて復た出で、崇明に次る。煌言来会し、瓜州を取りて、鎮江を攻め、煌言をして前に駆りて、江上に沂らしむ。(中略)成功は鎮江に入り、將に令に違ふを以て全斌を斬らんとするも、繼ぎて之れを积し、焉こを守らしむ。江寧に進攻して、煌言の蕪湖に次りしとき、廬・鳳・寧・徽・池・太諸府県の多く款を通ずるが与に、書を成功に騰へて、宜しく旁郡県を収めて、陸師を以て急に南京を攻むべし、と謂ふ」。

(注四)「頻歳」詩の全文を挙げる。「頻歳孫恩乱、颯櫓庄海頭。伝烽連戍壘、野哭聚沙洲。司馬能清野、天吳漸穩流。江淮非異土、飄泊汝何憂(頻歳孫恩の乱あり、颯櫓海頭を庄す。伝烽は戍壘に連なり、野哭は沙洲に聚まる。司馬能く野を清くし、天吳漸く流れを穩やかにす。江淮は異土に非ず、飄泊して汝は何をか憂へん)。「孫恩」は、晋代、琅邪(安徽省滁州市琅琊区)の人。叔父の孫泰は、天下が戦争で乱れているのを見て、晋の統治も終わるだろうと考え、農民を集めて反乱を起こした。目論見が会稽の謝輅に発覚し、孫泰は誅殺された。孫恩は海に逃れて、亡命者を集めて、復讐を誓う。後、会稽で農民による反乱があり、その騒動に乗じて、孫恩は海上から会稽を攻めた(『晋書』卷一〇〇・孫恩伝)。ここでは、海上から江南を攻めた鄭成功を孫恩に見立てているのである。なお、詩中の「清野」は、戦時に食料等の敵に利用されそうな物をあらかじめ排除して、敵軍を兵糧攻めにする戦術である。「天吳」は水の神で、ここでは江南の川が穩やかさを取り戻したことを言う。

(注五)高橋和巳氏も、「彼の心は、たとえ、相対的安定であつても、安定し、平和である方がよいという、あり得べき心情へと傾いてゆく。はじめはアモイに、後には台湾によって執拗に清朝に抵抗する鄭成功にむけて、詩人は呼びかける」と述べ、「頻歳」詩の最後の二句を挙げた後、「もう充分ではないか、封爵をあたえるという清朝の勅降になぜ応じないのか、詩人は恐らくそう考えていた

のだ」(中国詩人選集二集一三『王士禛』「解説」一二〜一三頁、岩波書店、一九六二)と王漁洋の心情を解釈している。なお、鄭成功に封爵を与えようとした記事は、『清史稿』の鄭成功伝に見える。順治九年(一六五二)から一一年(一六五四)にかけて、清は再三爵位を与えるかわりに降服するよう呼びかけている。

(注六)鳩が桑を食い荒らすというのは、『詩経』国風・衛風「氓」第三章「桑之未落、其葉沃若。于嗟鳩兮、無食桑葚(桑の未だ落ちず、其の葉は沃若たり。于嗟鳩よ、桑葚を食らふこと無かれ)」及び、この章の「毛伝」に、「鳩、鶻鳩也。食桑葚過、則醉而傷其性(鳩は、鶻鳩なり。桑葚を食らふこと過ぎれば、則ち酔ひて其の性を傷つく)」と言うのに拠る。

(注七)「馬上郎」を「馬に跨るえらい役人さま」と訳したのは、「郎」を役人と解釈し、次句の「雉尾」を清の役人の帽子についた羽飾り、「紅錦裘」を満州族が防寒対策に着る皮衣と考え、「馬上郎」が清の高級官吏であると解釈したためである。現代の李毓芙氏は、「郎、古官職名、于此指達官。雉尾、紅錦裘・馬上郎的裝束(郎とは、古代の役職の名前で、ここでは高級官吏のことである。

雉尾・紅錦裘は、馬上の役人の衣裳である)」と注している(『王漁洋詩文選注』齊魯書社、一九八二)。現代の人が高級官吏(達官)と注するのに対し、清代に『漁洋精華録』に注した惠棟・金榮は、「雉尾紅錦裘」の句に対して注を付けていない(惠棟『漁洋山人精華録訓纂』卷一上、金榮『漁洋山人精華録箋注』卷二)。これは、清朝批判をしたと解釈されるのを避けたためではないだろうか。

(注八)清・查繼佐(一六〇一〜一六七六)の『罪惟録』列伝卷三一・張獻忠伝(浙江古籍出版社、一九八六)に拠れば、「遇敵鳳凰山、(張獻忠)挙弓睨北師左部、北師右部将亦睨射獻忠、則獻忠与左部将並倒、為丁亥十月之十一也(敵に鳳凰山に遇ひ、弓を挙げて北師左部を睨し、北師右部将も亦た睨して獻忠を射れば、則ち獻忠と左部将と並びに倒る、丁亥十月の十一為り)」とあり、張獻忠が死んだのは順治四年丁亥(一六四七)となっている。

(注九)『罪惟録』列伝卷三一・孫可望伝に、「(孫)可望頗專制、命(劉)文秀守蜀、而身從貴州窺雲南。文秀遂与平西(吳)三桂三戰、皆大捷。三桂屯漢中相拒、已勢促連敗(可望は頗る専制にして、文秀に命じて蜀を守らしめ、而して身ら貴州従り雲南を窺ふ。文秀は遂に平西の三桂と三たび戦ひ、皆大捷す。三桂は漢中に屯して相拒むも、已に勢ひ促して連敗す)」とある。

(注一〇)『清史稿』李定国伝に、「(順治)六年春、(孫)可望密与(劉)文秀謀、藉演武声定国罪、縛而杖之百(六年春、可望は密かに文

秀と与に謀り、演武の声に藉りて国罪と定め、縛りて之れに杖すること百たびす」とある。

(注一一)『清史稿』巻四七四・呉三桂伝に、「(順治)十四年、(孫)可望反明、攻朱由榔、(李)定国禦之。可望敗走長沙、来降。詔授(呉)三桂平西大將軍、与(李)国翰率師徇貴州。時羅託・経略洪承疇等出湖南、將軍卓布泰等出广西、三道並進。(呉)三桂等發漢中、道保寧・順慶、次合州、破明兵、收江中戰艦(十四年、可望は明に反して、朱由榔を攻め、定国は之れを禦ぐ。可望は敗れて長沙に走り、来降す。詔して三桂に平西大將軍を授け、国翰と与に師を率ひて貴州を徇らしむ。時に羅託・経略の洪承疇等は湖南を出で、將軍の卓布泰等は广西を出でて、三道並びに進む。三桂等は漢中を發し、保寧・順慶を道て、合州に次り、明兵を破りて、江中の戰艦を収む)」とある。

(注一二)漁洋の「丁酉詩自序」は、「汪棣曰、山人丁酉詩自序、云云」という形で引用されている。また、『王士禛全集』第一冊所収の『漁洋集外詩』巻一(齊魯書社、二〇〇七)にも、丁酉詩の「自序曰」という形で見える。

(注一三)江南地方で養蚕が盛んであることは、宋・范成大(一一二六〜一一九三)『呉郡志』巻一・土貢に、「唐之土貢、考之唐書、所貢、糸・葛・糸綿・八蚕糸(唐の土貢、之れを唐書に考するに、貢ぐ所、糸・葛・糸綿・八蚕糸)」とあることから分かる。また、陝西省で養蚕が盛んだったことは、明・康海『武功県志』巻二・田賦志第四に、「地東南、大宜木綿・桑、故蚕織之業広焉。然多為細人覬覦營利。故其人反貧甚、至寒不得衣繼綈(地の東南、大いに木綿・桑に宜し、故に蚕織の業は広し。然れども多く細人の為に鋭利を覬覦せらる。故に其の人は反て貧なること甚しくして、寒に至るも繼綈を衣るを得ず)」とあることから分かる。四川地方で、養蚕が盛んだったことは、王漁洋の「山蚕詞四首」其一からも窺える。

(注一四)惠棟は「山蚕詞四首」の「山蚕」に注として、明の文翔鳳の『雲夢葉溪談』を引いている。『香祖筆記』巻五と同様の文章である(『漁洋山人精華録訓纂』巻五上)。惠棟が引いた書物は、『葉溪談記』と同一のものと思われる。

(注一五)「師古曰」以下の言葉は、『尚書』夏書・禹貢の「厥篚絜糸」に付された孔安国の「伝」に見える。顔師古の言葉とする根拠は分からない。

(注一六)文中の「蘇氏」は、宋の蘇軾(一〇三六〜一一〇一)のこと。彼の文は、『尚書』夏書・禹貢に付された注であり、『東坡書

伝』巻五に見える。

(注一七) 惠棟は「山蚕詞四首」其三「三熟」の語に、清の孫廷銓(一六一三〜一六七四)『山蚕説』を引いて注とする。その文に、「野蚕与家蚕相後先。然其種者、春夏及秋、歳凡三熟也(野蚕と家蚕と相後先す。然れども其の種かなる者、春夏より秋に及ぶまで、歳に凡そ三たび熟せり)」とある(『漁洋山人精華録訓纂』巻五上)。

(注一八) 後魏・賈思勰『齊民要術』巻五・種桑柘第四五・附養蚕に、「永嘉記曰、永嘉有八輩蚕。𧈧珍蚕、三月績。柘蚕、四月初績。𧈧蚕、四月初績。愛珍、五月績。愛蚕、六月末績。寒珍、七月末績。四出蚕、九月初績。寒蚕、十月績。凡蚕再熟者、前輩皆謂之珍(永嘉記に曰く、永嘉に八輩蚕有り。𧈧珍蚕は、三月に績ぐ。柘蚕は、四月の初めに績ぐ。𧈧蚕は、四月の初めに績ぐ。愛珍は、五月に績ぐ。愛蚕は、六月の末に績ぐ。寒珍は、七月の末に績ぐ。四出蚕は、九月の初めに績ぐ。寒蚕は、十月に績ぐ。凡そ蚕の再び熟する者、前輩は皆之れを珍と謂ふ)」とある。

(注一九) 『唐代詩人論(三)』の「杜甫の社会詩人への脱皮」五(六二〜六七頁)、及び「杜甫「三吏三別」の特異性」(七六〜一一八頁)を参照。

(注二〇) 漁洋の杜甫批判説を推すものに、清・趙執信(一六六二〜一七四四)の『談龍録』がある。その第一六條に、「阮翁酷不喜少陵、特不取頭攻之。每举楊大年村夫子之目以語客(阮翁は酷だ少陵を喜みせずして、特に敢へて頭かに之れを攻めず。毎に楊大年の村夫子の目を挙げて以て客に語る)」とある。楊大年は宋・楊億(九七四〜一〇二〇)の字である。「楊大年云云」は、宋・劉放(一一〇二〜一一〇八)の『中山詩話』第一六條に、「楊大年不喜杜工部詩。謂為村夫子(楊大年杜工部の詩を喜みせず。謂ひて村夫子と為す)」とあるのに拠る。なお、杜甫が『唐賢三昧集』に採られていない理由は、岡田祥子「王漁洋の『唐賢三昧集』について」(『お茶の水女子大学中国文学会報』第六号、一九八七)に詳しい。

(注二一) 詳しくは、鈴木修次『唐代詩人論(三)』「杜甫の社会詩人への脱皮」五の六三頁を参照。鈴木氏は、杜甫が民衆のために詩を作る社会派詩人としての姿勢を持つ契機となったのが「兵車行」だとしている。

(注二二) 詳しくは「新安吏」に付された杜甫の自注、および、『旧唐書』巻一二〇、『新唐書』巻一三七・郭子儀伝を参照。

(注二三)詳しくは『唐代詩人論(三)』一〇〇頁を参照。

(注二四)「報道文学」については、『唐代詩人論(三)』一〇五―一〇八頁を参照。

(筑波大学大学院人文社会科学研究所博士課程)

王漁洋の戦争批判詩―「蚕租行」を中心として― (荒井)